

はじめに

がんに対する免疫療法と聞いて、皆さんはどのようなイメージをもたれるでしょうか。「自分自身の免疫力を利用するので、副作用がない素晴らしい治療」というイメージがもしもありませんし、逆に、「明らかな効果がないのに一般に広まっている、あやしい治療」というものかもしれません。がん免疫療法という広範で複雑な治療法にはいろいろな側面がありますので、多くの異なるイメージをもたれるのは当然のことです。

ただし、ひとつ確実に言えることは、がんに対する免疫療法が近年大きく進歩し、治験とよばれる厳密な臨床試験をパスして医薬品として承認されたものが出てきた、ということです。免疫チェックポイント阻害剤（抗PD-1抗体）と呼ばれる薬剤が優れたがん治療効果を示す、という話題を耳にされた方も多いと思います。もちろんすべてののがんに効くわけではありませんし、副作用などいろいろな問題もあります。そういう意味では、がんの免疫療法はますます複雑で理解しにくいものになったのかもしれない。また、免疫学にはリンパ球や樹状細胞など多くの登場人物があり、それらがお互いに影響し合うため、とても複雑な学問と言えます。がんの生物学についても、がん種や患者さんごとに異なる遺伝子変異などの難しい特徴があります。難しい疾患を免疫という難しいシステムで治療するわけですから、最新のがん免疫療法に関する書籍はどうしても難解なものになりがちです。

そこで本書は、今後のがん治療のひとつの柱となりうる免疫療法をできるだけ平易な言葉を用いてわかりやすく解説し、その基本的なしくみと現在の課題、そして将来展望をやさしく学べる手引書として作られました。

がんという病気はとても治療が難しい疾患です。予防のための医学研究や早期発見のための技術も日々進歩していますが、残念ながら我が国においてがんで死亡する患者さんの数は年々増加しています。読者の皆さんのご家族やお知り合いの方にも、がんと闘っている方がいらっしゃるかもしれません。私は医師としてがん患者さんを診療した経験から、何とかしてもっと効果的で新しい治療法を開発できないか、がんと生体が共存できる状態を作れないか、との思いからがん免疫学の研究を始め、20年以上続けてきました。がん免疫療法の歴史には多くの光と影がありますが、科学的根拠に基づき、統計学的にも効果が認められる治療法がやっと確立されつつあります。

この潮流を絶やさず、さらに進展させるためにも、がん免疫療法について正しく理解することはとても重要なことです。本書がその一助になればこの上ない幸せです。

2016年9月

初秋の日差しに包まれた免疫学教授室にて
玉田 耕治